

「文化から見る国際社会の理解」

武蔵野学院大学 佐々木隆

講習目的

小学校から高等学校教諭を対象に、クール・ジャパンに代表される発信型の日本文化の魅力について、ポップカルチャーを焦点に当てて事例を多く紹介した。特に、クール・ジャパンとは何か、具体的な例としてマンガやアニメに代表されるポップカルチャーが如何に海外に受け入れられているか、また、日本の生活に入り込んでいるか、政府はどのような政策を進めているのかを理解してもらうために多くの事例を提供することを目的とする。

講習内容

教員免許状更新講習



講習担当者として準備したものとしては講習の資料(左写真) A サイズ全 38 頁+20 頁(パワーポイント縮刷版)を印刷したものを配布した。特に専門用語の解説として、「文化外交」「クール・ジャパン」「Nation Brand」「Good Country Index」「オタクツーリズム(コンテンツツーリズム)」の資料を中心に構成した。

特に「クール・ジャパン」がいつ、誰が、どのように発表し、内容はどのようなものなのかを原典を紹介しながら進めた。受講者が小学校から高等学校教諭に渡っていることや免許状の教科が異なっているため、基本的な用語についてはその原典や考え方を説明した。現在はこうした原典がインターネットで閲覧できることから、そのサイトを紹介し、教員自身の理解を深め、教材研究の一助なることを目的に資料等も構成した。

最近テレビ等でも項目別による国別ランキングが紹介されているが、これが「Nation Brand」「Good Country Index」をもとにして作成されていること、これにより各国が自国の魅力を世界にアピールし、外国人観光客の増加を狙っていることなど、その背景にあるものを解説した。こうした動きはすべて国の政策によるもので、現在日本はクール・ジャパンを活用した観光立国を目指し、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて動いていることなども紹介した。

クール・ジャパンは「外国人から見てかっこいいニッポン」というコンセプトを基にし、マンガ、アニメ、ゲームをはじめ、ファッション、Made in Japan の小さくて高性能な家電製品、時間厳守の交通機関や宅配便などであることを改めて確認した。特にマンガ、アニメ、ゲームの普及ぶりは想像を超えて勢いがあり、8月21日のリオオリンピックの閉会式におけるフラッグオーバー・セレモニーでも日本のポップカルチャーがその重要な役割を果たしたことは時宜

を得た例であった。ハローキティ、大空翼、パックマン、ドラえもん、スーパーマリオが登場したが、その背景についても追加の資料を用意した。ハローキティはユニセフの親善大使を務め、大空翼は『キャンプテン翼』の主人公として中東での PKO の際に自衛隊の車両にラッピングされる実績を持ち、パックマンは 2012 年には歴史上最も偉大なビデオゲーム 100 本に選ばれている。ドラえもんは外務省がアニメ文化大使に任命し、スーパーマリオは人気のあるゲームとして世界中に知られているだけでなく、今回はマリオの「リオ」がリオオリンピックに掛かっていることから登場したことや、『ドラゴンボール』や『ワンピース』といった戦闘的なものは避けられたのではないかと解説した。日本の伝統文化を封印してポップカルチャーが最大限に活用したセレモニーであったことは、クール・ジャパンを全面に出したイベントであった。当初は講習の教材ではなかったが、世の中の流れを察知し、最新のコンテンツを提供することが講習も目的であるため、急きよ講習に組み入れた。



講習会場にはクール・ジャパンや文化外交に関する資料（に日本語・英語・中国語）のものを展示した。また、ラッピングバスや電車など、日常で見かけるものについても、写真を数枚展示した。

講習の最後に紹介したものは『せかいでいちばんつよい国』の絵本である。

この絵本を受講者に読み聞かせしたが、国の魅力、まさに文化外交の本質が絵本として表現されているものであつ

た。受講者自身の知見をひろめることも重要であるが、小学校から高等学校までの学校種に応じて資料を揃え、教育現場でフィードバックできるようにした。番外編としてオバマ大統領の広島訪問におけるスピーチや鎖国中でありながら葛飾北斎が上町祭屋台天井絵『女波図』（1845）に天使の絵を描いた例なども紹介し、新しい動きなどについて注目していくことの重要性についても確認した。



『別冊太陽』（北斎決定版）

（平凡社、2013年7月）、p.161

講習内容の自己分析

受講者のアンケートには「クールジャパンという言葉は知っていましたが、オタク文化を含めポップカルチャーの発信を利用してのソフトパワーの偉大さに、あらためて考えさせられました」とあり、これがまさに講習の目的であったことから、講習の核となる部分は受講者が理解し、講習も目的は達成されたのと確信する。

教員免許状更新講習 選択講座 6 (平成 28 年 8 月 26 日 (金) 9:00~10:30)

「身近な英語で教材作成—文学・映画・アニメ」

武蔵野学院大学 佐々木隆

講習目的

中学校及び高等学校教諭を対象とし、英米文学史を振り返ると共に、アニメやマンガのキャラクター名が英語で表記されている様々なものについて、教材作成といった観点から紹介し、それを現場でどのように生かせるかを考察しながら、多くに事例を提供することを目的とする。

講習内容

教員免許状更新講習

身近な英語で教材作成
～文学・映画・アニメ～
(229-20109-1071166)



武蔵野学院大学
講習担当: 佐々木隆
2016 年 9 月

表紙

講習担当者として準備したものとしては講習の資料(左写真) A サイズ全 86 頁+24 頁(パワーポイント縮刷版)を印刷したものを配布した。その目次は以下の通りである。

- 1 英語科 区分「英米文学」の位置付け
- 2 教員免許状更新講習の意義
- 3 英国史と英文学史
- 4 米国史と米文学史
- 5 シェイクスピア没後 400 年
- 6 マンガ/アニメを利用した英語教材研究
- 7 英語になった日本語
- 8 マララ・ユフスザイ

実際の講習では講習担当者が中学校・高等学校の英語科教員として中学校 1 年生から高校 3 年生までの授業の担当歴があり、現在は大学で英語科教育法を担当していることを紹介し、現場経験があることを伝え、受講者との意識的な共有を図り実際の講習に入った。

教材研究を英米文学に求めることはよくあるが、現実的に英米文学の作品を原書で読む時間はほとんどない背景から映画としてこれを吸収することが一つの方法であること、また、配布した教材には映画中の名セリフやフレーズを英語・日本語で掲載した。特に、中学・高校生が映画鑑賞する可能性の高いものを選び紹介した。中には英語辞典にそのまま例文として掲載されているものもあり、教材が身近にあることを強く意識してもらった。

次に 2016 年がシェイクスピア(1564-1616)の没後 400 年にあたることから、シェイクスピアの名台詞については特に触れた。例として、作品名にもなっている *All' Well That Ends Well*。(終わり良ければすべてよし)、『ベニスの商人』より *All is not gold that glitters*。(輝くもの必ずしも金にあらざるなり)の台詞などは関係代名詞 *that* の例文としてよく使

用されていることや、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』では It is our choices that show what we truly are, far more than our abilities. (自分が本当に何者かを示すのは、持っている能力ではなく、自分がどのような選択をするかだ) を取り上げ、内容もさることながら、it is... that の構文が使用されていることなども紹介した。

次にマンガ／アニメを利用した英語教材研究の事例として、キャラクター名と英語の関係について紹介した。その一部を紹介すると以下の通り。(『ドラゴンボール』より)

野菜 → ヤサイ → サイヤ人 (アナグラムになっている点に注目)
惑星ベジータ → 野菜の英語は vegetable
カカロット (孫悟空は赤い洞着を着ている) → carrot → 人参をイメージ
カカロットの父の名前はバーダック → burdock → ゴボウ
※サイヤ人なので、野菜の英語で統一
人造人間セル → cell → 細胞
※これまで戦った戦士の細胞を集めて作られた人造人間

このほか、『ポケットモンスター』のモンスター名が Lizard, Gallop, Spear をはじめ、英語が使用されることが多いことなどをパワーポイント (絵入り) で紹介した。

英語になった日本語では 2010 年に初めて英語の紙辞書 *Oxford Dictionary of English* (2010) に “hikikomori” が収録され、その英語を受講者にも確認してもらい、“typically by adolescent males” となっていることから、男性に関する大きな偏見があることも理解してもらった。また、“bento” の定義でも “a Japanese style packed lunch, consisting of such items as rice, vegetables, and sashimi” となっているなど、日本理解が進んでいるようで進んでいない一端を紹介した。会場には講習の参考となるような書籍等も展示し、休憩時間にも閲覧できるように工夫し、受講環境においても講習色を強める工夫を行った。



講習内容の自己分析

英米文学が原作となる映画が多くあることはある程度受講者も解っていたが、その数の多さに驚いていたようだ。受講後のアンケートではマンガやアニメのキャラクターに如何に英語が多く使用されていたか、講習用の配布物 (教材) に関心が寄せられていた。講習以後、教育現場で講習の成果が生かされ、教材となるものがマンガ、アニメから映画に至まで溢れていることが提供でき、受講者が教材研究がより身近に感じられたと確信する。